人間と自然資源 第34回

# 空海が歩いた遍路道で平安時代にタイムスリップ

## 阿南（四国遍路）

住民との連携で四国最古の遍路道を復活・再生

古田尚也 IUCN日本リエゾンオフィスコーディネーター

徳島県阿南市には、国史跡にも指定された古い遍路道が残されている。
地元住民と連携してこれを再生・維持管理していくことで、
インバウンド観光も視野に入れた地域創生の新たなモデルが見えてきた。

撮影●古田尚也　協力●鈴江省吾（大正大学地域構想研究所阿南支局長）

### 昔ながらの遍路道が残る阿南

四国遍路とも呼ばれる、弘法大師空海にゆかりの四国八十八カ所の霊場をめぐる巡礼は、近年、日本人ばかりか外国人にも人気のアクティビティとなっている。

八十八カ所の霊場は、第一番札所霊山寺（りょうぜんじ）がある阿波の国（徳島県）「発心の道場」23カ寺、土佐の国（高知県）「修行の道場」16カ寺、伊予の国（愛媛県）「菩提の道場」26カ寺、讃岐の国（香川県）「涅槃の道場」23カ寺からなる。この八十八カ所の霊場寺院を結ぶ道は遍路道と呼ばれ、総延長は約1400kmに達し、徒歩では40日程度の日数を要する。

この四国八十八カ所の霊場は、空海が開いたものとされているが、いつごろどのように成立したかについては諸説ある。ただ、江戸時代に入ると四国遍路の案内記が出版されていることから、少なくともその頃には、現在の遍路歩きに似た巡礼が行われていたと考えられている。

また、対象に含まれる霊場寺院や巡礼道も時代とともに変わってきた。今では遍路道の多くは舗装道路となり、国道など幹線道路も

太龍寺山の舎心ヶ嶽には空海の像が置かれている。

1 空海が100日間の虚空蔵求聞持法の修行をしたとされる太龍寺山から紀伊水道を望む。2「西の高野」と呼ばれる21番札所太龍寺の大師堂。3 太龍寺の多宝塔。標高約600mに位置する太龍寺は、「へんろころがし」と呼ばれる難所の一つであった。

含まれている。このため約１４００㎞の遍路道のうち、昔ながらの雰囲気を留める未舗装の土の道の区間は、わずか１００㎞程度しか残されていない。その１００㎞の未舗装の道のうち、実に約10㎞あまりが徳島県阿南市にあるのだという。それればかりではない。阿南市には空海が実際に歩いたと考えられる最古の遍路道も残されているというのだ。

## 現存する最古の遍路道「かも道」

四国の中で空海が実際に訪れて修行をしたことが、史実として確認できる場所はそれほど多くない。その著書『三教指帰』には、室戸岬の洞窟御厨人窟での修行のほか、大瀧嶽での修行について書かれている。この大瀧嶽というのは、現在21番札所となっており、「西の高野」とも称される阿南市加茂町太龍寺がある太龍寺山だといわれている。

『三教指帰』によれば、空海は19歳の時、現在の太龍寺境内から南西約６００ｍの場所にある「舎心ケ嶽」の岩上で、１００日間の虚空蔵求聞持法と呼ばれる修行をしたのだという。

現在、その舎心ケ嶽の岩には弘法大師像が高野山のある東の方角を向き鎮座している。緑深い山々の遠くには、紀伊水道の青い海が見える。１２００年以上前、空海もこの景色を目にしながらこの場所で修行に励んだのだろうか。

この弘法大師ゆかりの太龍寺から、ふもとの加茂町一宿寺に至る４・４㎞が「かも道」と呼ばれる古道だ。「かも道」には、道沿いに丁（町）石と呼ばれる標石が残

4「かも道」の中で、石灰岩の露出した「白の道」と呼ばれる部分。手前に丁石が見える。空海もこの道を歩いて太龍寺に向かったと考えられている。5 旅の途中で行き倒れた人を葬った遍路墓。6 遍路道であることを示す道案内。7「かも道」など阿南市における遍路道の復活や文化財指定に取り組んできた阿南市文化振興課の向井さん。

されている。丁石とは1丁（約１０９ｍ）おきに立てられた道標で、「かも道」の丁石には南北朝時代にあたる貞治四年（１３６５）の年号が刻まれている。これは四国遍路道に残された最も古い石造物であり、「かも道」が四国遍路が定着する以前からあった古道であることを示す証拠となっている。

「若き日の空海が、実際の修行場所として訪れたことが歴史上確実なのは、徳島県の太龍寺山と高知県の室戸岬だといわれています。では、空海が実際に歩いた遍路道が現在、どこに残されているのかといえば、それは『かも道』だといえるでしょう」と話すのは、阿南市文化振興課の向井公紀さんだ。

「かも道」は、その丁石が示すように古くから道として利用され、また開発の手も及んでこなかったことから、昔からの遍路道の景観が保たれている。

実際、「かも道」には丁石のほかにも、西国三十三観音を祭った石室、遍路の途中で病気などで行き倒れて亡くなった人を葬った遍路墓や弘法大師坐像などの石造物が道沿いに数多く残されている。

そのほかにも、空海が杖をひと突きして20番札所の鶴林寺まで飛んで行ったとされる場所や、空海がこぶしで受け止めたとされる岩、そして太龍寺山山頂に向かって少しずつ動いているといわれる「にじり石」と呼ばれる岩など、空海の伝説にまつわるたくさんの事物が「かも道」には残されている。

西国三十三観音を祀った石室。

## 廃道だった「かも道」の復活

このように歴史ロマンに満ち溢

れた「かも道」も、つい最近まで、人々から忘れ去られた存在となっていたのだという。

「初めて『かも道』のことを知ったのは、2006年（平成18）に丁石周辺の環境整備事業にかかわった時でした。当時、道には藪が生い茂り、荒れ果てて歩くこともできないような状態でした。ところが、一緒に清掃に参加していた方から、この道は50年前まで多くの人が太龍寺参拝のために歩いていた道で、空海にまつわるさまざまな史跡があることを教えてもらい興味を持ち始めました」と向井さん。

ちょうどその頃、四国八十八カ所を世界遺産にしようという取り組みが四国四県で始まったところだった。しかし、遍路道自体が文化財として守られていないことが大きな課題となっていた。そこで、09年から遍路道を文化財にする取り組みが始まり、阿南市では20番札所の鶴林寺から21番札所の太龍寺、22番札所の平等寺にかけてのルートを対象に、徳島県及び勝浦町と協力して文化財の調査が行われた。さらに10、11年には、国の緊急雇用創出事業で関連ルートの測量調査や整備事業が行われた。

こうした取り組みにより、10年8月には「阿波遍路道～鶴林寺道・太龍寺道・いわや道～」が国史跡に指定されることとなった。その後も、追加指定が行われ「かも道」も15年に国史跡に指定された。

## 地元の人たちが遍路道を維持管理する仕組みづくり

こうした活動の中で出てきた一番の課題は、遍路道の維持管理の仕組みづくりだったという。

「調査と整備までは役所中心に行うことができます。しかし、市役所で遍路道の維持管理を全部やろうとすると、例えば台風による倒木被害の対策に、予算の承認から執行まで最低2～3週間の時間がかかってしまいます。しかし、その間にもお遍路さんはどんどん来てしまう。下手をするとその年の予算がとれずに、来年度事業になってしまうという問題がありました」と向井さんは振り返る。

そこで、向井さんがとった方法は、遍路道に関する地元向けの講演会を何度も開催し、地元の人たちが遍路道の維持管理を担う「守る会」をつくってもらうというものだった。何度も講演会を行ううちに、地元の人たちの間にも「かも道」が重要なものだという認識が高まっていった。こうして地元住民による「加茂谷へんろ道の会」が2013年に結成された。

会のメンバーは現在約30名で、ほぼ地元の人たちで構成されている。市は、年に2回の事業を会に委託し、「かも道」の維持管理作業が行われている。こうした取り組みが徐々に評価され、現在では地元企業からも寄付金が寄せられるようになってきたのだという。

毎年11月末には、遍路道を歩く「おもかげウォーク」というイベントも開催している。会の方々は、こうした機会に参加者のためのガイドも行う。その他の機会も含め、会の方々は年に10回ぐらいのガイド活動をしているのだという。

加茂谷で民宿を営む原幸喜さん、恵美さん夫妻もこの会のメンバーになり活動を行っている。女将の恵美さんは参加の経緯について次のように話してくれた。

「主人は加茂谷出身ですが、以前は『かも道』というものがあるということすら知りませんでした。しかし、向井さんの講演会をきっかけにこの活動に参加し始めました。この宿は、もともとは農家民宿として始めたのですが、だんだんお遍路さんの宿泊が多くなり、現在はオランダ、台湾など半数以上が遍路道を歩く外国人の宿泊客となっています」

## 平安時代にタイムスリップ

「かも道」では歴史ある文化財として、手すりや擬木などの人工物を排し、できる限り古来の遍路道の雰囲気を保全する整備と維持管理に努めている。

「往時の雰囲気を残した古道を歩けば、空海のいた平安時代にタイムスリップした気分が味わえます。空海もこの道を踏みしめ、この風景を眺めていたのかと思うと感激して心が洗われます」（向井さん）

四国遍路のような歩く旅は、欧米でも人気の旅行スタイルであり、高齢化の進む日本では健康づくりなどの目的で、今度ますます需要が高まるものと考えられる。こうしたニーズに応えるインフラとして、地元の人たちと一緒になって遍路道を維持管理する阿南の取り組みには、他の地域も参考にできる、歴史と自然を生かした地域創生のためのヒントが隠されている。

Naoya Furuta
大正大学地域構想研究所教授。
東京大学大学院農学生命科学研究科
博士課程単位取得退学。三菱総合研究所を経て、
2009年よりIUCN（国際自然保護連合）の
日本オフィスにおいて生物多様性に関する
国内外の政策展開に従事する。

謝辞●本稿は、平成29年度　大正大学学術助成金の支援を受けたものです。

1 加茂谷の「果樹オーナーの宿　碧」は、当初農家民宿として始めたが、最近では外国人のお遍路さんのお客さんが大半を占める。2 オーナーの原さん夫妻。3 いろりで提供される郷土料理。

4 阿南市にある22番札所の平等寺。5 弘法大師が掘ったという井戸からは、万病に効くとされる「弘法の霊水」が湧き出る。6 米国の人類学者フレデリック・スタール博士が同寺を訪れた際に残した資料を見せてくださった谷口真梁副住職。